PRESS RELEASE

とやま国際工芸シンポジウム

International Symposium on KOGEI in Toyama

世界で活躍するデザイナーを迎えて「とやま国際工芸シンポジウム」開催

キーワードは、こえる　つながる　ひろがる　つたわる

伝統工芸の技をベースに、新たなチャレンジを続ける工芸作家や、現代のニーズをとらえたデザイン戦略で新たな定番商品を発信し続けるものづくり産業など、国内外で話題を集める富山県。優れた工芸作品や商品が日々生み出されていますが、これまでの常識を超え、さらなる創作につなぐ刺激として、9月3日（土）、「とやま国際工芸シンポジウム」を開催します。

第1部は、文化庁長官の宮田亮平氏を講師に迎えてお送りする基調講演。「文化芸術立国の実現に向けた文化力プロジェクトの推進～これからの工芸のあり方～」と題し、国が進める文化プログラムの基本構想をお話しいただきます。宮田氏は、自身も金工作家として数々の作品を発表するアーティストであり、長官就任後初の講演として注目を集めています。また、富山県が策定を進めている文化長期ビジョンについて、石井隆一富山県知事が講演します。

第2部は、建築家でデザイナーのマリオ・トリマルキ氏（ミラノ）、デザイナーのトード・ボーンチェ氏（ロンドン）、テキスタイルデザイナーで東京造形大教授の須藤玲子氏など世界のデザインシーンで活躍するゲストのほか、「NOUSAKU」として海外出店も果たした（株）能作社長の能作克治氏を招きパネルディスカッションを開催。ディスカッションには知事も加わり、「ＫＯＧＥＩの世界的な潮流を探る～「工芸」のリーディングプロジェクトを富山から～」のテーマのもと、世界から見た富山の工芸や今後の進むべき道について、熱いトークを展開します。

2017年「国際工芸サミット」の開催を視野に

文化庁では2020年の東京オリンピック・パラリンピックに関連した文化プログラムとして「国際工芸サミット」の北陸開催が検討されており、今回のシンポジウムは富山での開催機運を高めるプレイベントとしても注目を集めています。

シンポジウムはもちろん、国際工芸サミットの開催が決定すれば、さらに様々な出会いと交流が期待できます。世界へ、未来へと可能性が広がる富山県から、ますます目が離せなくなりそうです。

※富山県の伝統工芸については、別紙資料をご参照ください。

とやま国際工芸シンポジウム

日時：９月３日（土）13:15 ～ 17:30　（開場 12:45）
会場：富山国際会議場　３Ｆメインホール
定員：500 名／入場無料

第１部　基調講演
文化芸術立国の実現に向けた文化力プロジェクトの推進
～これからの工芸のあり方～
宮田亮平氏　文化庁長官・金工作家

第２部　パネルディスカッション
ＫＯＧＥＩの世界的な潮流を探る
～「工芸」のリーディングプロジェクトを富山から～

パネリスト

マリオ・トリマルキ氏　建築家／デザイナー／ＮＡＢＡ（芸術アカデミー）教授
トード・ボーンチェ氏　デザイナー／元ロイヤル・カレッジ・オブ・アート教授
須藤玲子氏　テキスタイルデザイナー／東京造形大学教授
能作克治氏　株式会社能作　代表取締役社長
石井隆一　富山県知事

モデレーター

桐山登士樹　富山県立近代美術館副館長

同時開催

とやまクラフト ～未来をつなぐクラフト展～

富山県民会館 1階ロビー

9月3日（土）10:00～17:00 ・ 4日（日）10:00～16:00

富山県ゆかりの作家による作品展。伝統の上に新たなチャレンジを重ねる、未来につなぐ工芸作品を紹介します。また、現代のライフスタイルにあわせて進化を続ける富山のプロダクツを展示します。

ワークショップ

高岡銅器や高岡漆器のクラフト・五箇山和紙バッヂづくりなど。
※体験料がかかります

D&DEPARTMENT TOYAMA

9月3日（土）～30日（金）10:00～19:00

GALLERY

「とやま国際工芸シンポジウム」ゲストの仕事を紹介。世界の第一線で活躍するマリオ・トリマルキ氏、トード・ボーンチェ氏、須藤玲子氏の作品を展示します。

DINING コラボ企画　9月3日（土）～11日（日）

工芸品の食器やカトラリーで味わうお食事やスイーツが、期間限定で登場。使ってこそわかる工芸品の魅力をお伝えします。

◎貴媒体でのご紹介・取材をご検討くださいますようお願い申し上げます。　富山県文化振興課

お問合せ（プロモーション担当）

株式会社 PCO
〒939-8063 富山県富山市小杉 120　Tel：076-428-9166　Mail：info@pcojapan.jp

【別紙資料】

富山県の伝統工芸 （国指定伝統的工芸品）

富山県では、５品目が国の伝統的工芸品に指定されています。各産地では、若手の職人がデザイナーとのコラボレーションで商品開発にチャレンジしたり、新しい素材に着目した多様なジャンルの工芸作家が活躍するなど、常に新鮮な話題がつきません。こうした多彩な活動を支えているのは、400 年以上にわたって息づく伝統の技と「ものづくり」で生きてきた富山の土壌です。

高岡銅器（高岡市　S 50.2.17 指定）

慶長 16 年（1611）、二代目加賀藩主前田利長公が高岡城の城下町に産業を興すため、7 人の鋳物師を呼び寄せ、特権を与えて定住させたことが発端です。当初は鉄で生活必需品が作られており、その後銅器による梵鐘や灯篭、仏具や装身具などが作られるようになり、一大鋳物産地が形成されました。現在も、人間国宝や現代の名工をはじめとする多くの工芸士により、大仏やブロンズ像、梵鐘など大型のものからアクセサリー小物まで様々な製品が作られています。

井波彫刻（南砺市　S 50.5.10 指定）

「散居村」の景色が広がる砺波平野の南端に位置し、14 世紀末に建立された井波別院瑞泉寺の門前町として栄えてきました。井波彫刻は、18 世紀中頃、瑞泉寺の本堂が焼失し、再建の折に京都から派遣された御用彫刻師により、井波の大工に技術を伝えたことが始まりとされています。現在では、寺院彫刻で培った丸彫りや透かし深彫りの技を活かして、欄間や置物など、様々なものが作られています。

高岡漆器（高岡市　S 50.9.4 指定）

江戸初期、現在の富山県高岡市に高岡城が築城され、城下町が形成されました。やがて家具類を作る指物屋町ができ、家具に漆を塗るようになったのが高岡漆器の始まりとされています。江戸時代半ばには、中国から漆を塗り重ねて彫刻を施す技法が伝えられ、紅、紫、白などの色漆を使って立体感を出す多様な技術が生み出されました。時代のニーズを感じ取り、製作してきた高岡漆器は、受け継いだ技をもとに、暮らしに馴染むものづくりを行っています。

庄川挽物木地（砺波市　S53.7.14 指定）

慶応 2 年（1866）、飛騨地方や五箇山の木材の一大集散地であった庄川町に越後屋清次が移住し、ろくろ挽物の木地屋を営んだのが庄川挽物木地の始まりと伝えられています。横挽による美しい杢目が特徴で、トチやケヤキなどの国産材を使用した椀や盆、皿などの丸物木地製品の生産や、全国の漆器産地に供給する下地の製造を行っています。

越中和紙（富山市・南砺市・朝日町　S63.6.9 指定）

八尾（富山市）、五箇山（南砺市）、蛭谷（朝日町）の産地からなり、総称して「越中和紙」と呼びます。奈良時代の書物に紙の産地として「越中」が記されており、平安時代には納税品として紙を収めた記録があります。障子紙、半紙、提灯紙、傘紙などの身近なものを中心に生活の中に紙が取り入れられました。和紙は強さと美しさを持ち、人々の生活様式に合わせ変化をとげながら今日に受け継がれています。